【3 月 26 日(金)、3 月 27 日(土)、3 月 28 日(日)】埼玉大学主催　国際シンポジウムのご案内

埼玉大学では国際シンポジウム（日英同時通訳付き）を下記の通り開催いたします。オンラインによるウェブセミナー形式で開催いたします。ご興味のある方はぜひお申込みください。

国際シンポジウム開催のお知らせ

日本をはじめとする世界各国で大学のキャンパスへの立ち入りや集会の制限によって、学術知の基本となる議論の開放性が失われつつある。また情報源や対話の場が限られることによって、人々の頼るべき情報や知が限定されてしまい、間違った情報を信じる可能性も生まれている。

こうした時代において、どうやってもう一度学術知の意義を再考し、その開放性や信頼性を高めるのかという課題に応えるため、埼玉大学では『パンデミック時代におけるアート・ミュージアム・インタラクション』(3 月 26 日)、『パンデミック時代における科学技術と想像力』(3 月 27 日、28 日)の 2 つの国際シンポジウムを開催する。

『パンデミック時代におけるアート・ミュージアム・インタラクション』では、日本を代表する芸術家、芸術論研究者、日本伝統芸能研究者、ミュージアムでの鑑賞を研究する社会科学者、ミュージアムでの鑑賞支援を研究する工学者、学芸員と、イギリスおよびフランスでミュージアムでの鑑賞の問題を研究する研究者があつまりパンデミック時代におけるアートとミュージアムについてのグローバルな議論を行う。

『パンデミック時代における科学技術と想像力』では、科学技術と想像力の問題で現代を代表する作家・文学者、人文・社会科学者、科学政策・教育の実践者、情報工学者が集まり、「パンデミック時代における科学技術がもたらす協働と分断化」「パンデミック後の知能と社会」の 2 つのテーマで、世界共通のパンデミック時代の課題について議論を行う。

文責：「パンデミック時代におけるアート・ミュージアム・インタラクション」
「パンデミック時代における科学技術と想像力」
運営委員会代表　山崎敬一（埼玉大学人文社会科学研究科教授）

国際シンポジウム
「パンデミック時代におけるアート・ミュージアム・インタラクション」

2020 年から続いている新型コロナウィルスの世界的流行により、不特定多数の人が集まる場であるミュージアムは、2020 年春先から断続的に閉館や展示の中止等の対応に追われた。これに伴い、Google 社によるオンラインミュージアムのサービス、日本を代表するアーティスト集団「ダム・タイプ」によるパフォーマンスの無料配信、ミュージアムによる作品カタログの無料公開など、多様な鑑賞のあり方に対する関心や需要が急速に高まっている。本シンポジウムは、芸術学、社会学、博物館学の各専門家と学芸員およびアーティストによる、パンデミック前とパンデミック後のアート・ミュージアム・インタラクションの変容を検討し、新たな方法論の提案を試みる。

第 1 部では、「観客と共創する芸術」をテーマに、インタラクティヴ・アートのオンライン鑑賞体験のあり方、および、ミュージアムにおけるガイドと観客のインタラクションについて発表を行う。芸術論の井口壽乃・加藤有希子の研究グループは、DIC 川村美術館と埼玉大学で行ったアイトラッカーを使用したオンライン鑑賞実験の

成果報告を、メディアアートの児玉幸子のグループは、埼玉県の酒蔵で行ったニューメディアアートの鑑賞実験の成果報告をそれぞれ行う。そして、社会学の山崎晶子は、ミュージアムにおけるガイドロボットと鑑賞者の相互行為の研究発表を行う。言語学・社会学の荒野侑甫は、児玉幸子の個展におけるガイドと鑑賞者のやりとりの会話分析の研究を発表する。

第２部では、「アート・ミュージアム・インタラクション」をテーマに、ロンドン大学キングス・カレッジのリーダー(Reader)で社会学のダーク・フォン・レーン (Dirk vom Lehn)と、ルーヴル美術館研究部の研究員のマチアス・ブラン (Mathias Blanc)、国立民族博物館准教授の広瀬浩二郎を迎え、研究発表を行う。広瀬浩二郎は、「“触”の大展覧会」の意義を足がかりに、触覚的作品と展示のあり方について報告を行う。ダーク・フォン・レーンは、イギリスのミュージアムにおける観客とガイド、観客と観客の相互行為のあり方にかんするエスノメソドロジー研究の発表を行う。マチアス・ブランは、フランス・ルーヴル美術館（ランス別館）を中心に鑑賞のあり方や鑑賞支援システムについて発表を行う。

最後に総合討論として、パンデミック時代のアート鑑賞のあり方と様々なインタラクションの可能性について、第１部の登壇者、大原美術館学芸統括の柳沢秀行、博物館学の暮沢剛巳を交え、全体討論を行う。

「パンデミック時代におけるアート・ミュージアム・インタラクション」運営委員会
（山崎敬一・埼玉大学、井口壽乃・埼玉大学、加藤有希子・埼玉大学、
陳海茵・埼玉大学、長谷川紫穂・埼玉大学）

国際シンポジウム
「パンデミック時代における科学技術と想像力」

新型コロナウィルスの世界的流行により、様々な学術的な課題や社会的な課題が生まれている。こうした課題は、パンデミックによって直接生み出されたものというよりは、これまでも存在はしていたが表面化していなかった問題や、これから将来問題になるような課題がパンデミックによって顕在化されたものと考えられる。それゆえ、パンデミック時代の課題を解決するためには、過去や現在の問題に対する分析を行う人文・社会科学者、未来の科学技術や社会を生み出す科学技術者や政策・教育の実践者、想像力でもって顕在化していなかった課題を現前させる作家・文学者との協働が必要である。

このシンポジウムでは、現代日本を代表する作家・文学者を第１部、第３部の基調報告者として迎え、パンデミック時代の現状や未来の課題についてグローバルな視点から語っていただく。第１部には、日本を代表する SF 作家であり『My Humanity』で第 35 回日本 SF 大賞を受賞した長谷敏司、日本を代表するミステリ作家であるだけでなくフェイクニュースの問題でも著書を出版した一田和樹を迎える。第３部には、日本を代表する文学研究者でありスタニスワフ・レムをはじめとする東欧 SF の翻訳・紹介者としても有名な沼野充義、SF・ファンタジー・ホラー小説家であるとともに、中華圏 SF の翻訳・紹介者として本年度の日本 SF 大賞特別賞を受賞した立原透耶を迎える。

第２部の「パンデミック時代における科学技術がもたらす協働と分断化」においては、近代市民社会成立期における統合と分断の社会文化史を研究する小林亜子（埼玉大学）、科学技術・情報技術がもたらす倫理的問題を研究する久木田水生（名古屋大学）を司会に迎え、AI がもたらす雇用の問題に関して日本を代表する研究を行っている経済学者の井上智洋（駒澤大学）、パンデミック時代における女性の働き方の問題の実証的研究を行っている経済学者の金井郁（埼玉大学）の発表の後に、ゲストスピーカーとともに議論する。パンデミックによって人々の対面コミュニケーションが困難になる中で、情報技術の重要性は増している。しかし情報技術は人々の協働を促進する一方で、フェイクニュースやヘイトスピーチを拡散することも容易にし、人々がフィルターバブルやエ

コーチェンバーに閉じこもることをもたらすことで、社会の分断を深刻化するかもしれない。本シンポジウムを、この困難な状況において科学技術と社会の現状と未来を多角的な視点から考える一つの機会としたい。

第４部の「パンデミック後の知能と社会」では、SF とイノベーションに関する研究を行う大澤博隆（筑波大学、日本 SF 作家クラブ理事）を司会に迎え、人と人とが直接接触することが難しいパンデミック後の社会設計において、人工知能技術やその他の情報技術がどのように貢献できるか、またその際にどのような問題が発生しうるかを検討する。認知科学の観点で教育と知能の社会応用に関わる安西祐一郎（日本学術振興会）、オーギュメンテッドヒューマンと拡張知能の観点での社会応用に関わる暦本純一（東京大学、ソニーCSL）倫理と哲学の観点で理工と人文に関わる研究・教育を実践する村上祐子（立教大学）を迎え、パンデミック後の社会における人の知能と人工知能の今後について議論する。

文責：「パンデミック時代における科学技術と想像力」運営委員会
（山崎敬一・埼玉大学、野中進・埼玉大学、小林亜子・埼玉大学、
大澤博隆・筑波大学、久木田水生・名古屋大学）

名称	パンデミック時代におけるアート・ミュージアム・インタラクション
日時	2021 年 3 月 26 日（金） 17:00～21:30
会場	Zoom ウェビナー（参加費無料、日英同時通訳付き） 定員：400 名 ※受付は先着順とし、定員になり次第、締め切りとさせて頂きます。
申し込み	申込フォーム[https://forms.gle/5fjRMk8f34oJKNmo9]よりお申し込みください。お申込みいただいた皆様の E-mail アドレスに、Zoom ウェビナーの参加方法を後日お送りいたします。
内容	総合司会・進行　山崎敬一（埼玉大学教授） 埼玉大学　挨拶　17:00～17:05 ==== **第１部　観客と共創する芸術**　17:10～18:45 **司会：浜日出夫（東京通信大学教授）、池谷のぞみ（慶應義塾大学教授）** **加藤有希子（埼玉大学基盤教育研究センター准教授）・井口壽乃（埼玉大学人文社会科学研究科教授）・陳海茵（埼玉大学研究員）「<u>アイトラッカーからみる臨場感：インタラクティヴ・アート鑑賞実験</u>」**/ Yukiko Kato, Toshino Iguchi, Kayin Chen, “Eye Trackers and the Sense of Reality: An Experiment in Watching Interactive Art” Sachiko Kodama, Tove Björk, Yoshinori Kobayashi, “<u>Art appreciation via the Internet: Focusing on remote viewing experiments of plays directed by new media art</u>”/ **児玉幸子（電気通信大学准教授）・ビュールク・トーヴェ（埼玉大学人文社会科学研究科准教授）・小林貴訓（埼玉大学理工学研究科教授）「インターネットを介した芸術鑑賞：ニューメディアアートで演出された劇の遠隔鑑賞実験を中心に」** Akiko Yamazaki, Keiichi Yamazaki, “<u>Mobility and appreciation</u>”/ **山崎晶子（東京工科大准教授）・山崎敬一（埼玉大学人文社会科学研究科教授）「移動と鑑賞」** Yusuke Arano, “<u>Recruited Guiding</u>”/ **荒野侑甫（埼玉大学学術研究員）「リクルーティド・ガイディング」**

	==== **第２部　アート・ミュージアム・インタラクション**　18:45～20:35 司会・討論：山崎晶子（東京工科大准教授）、西澤弘行（常磐大学教授） **広瀬浩二郎（国立民族学博物館准教授）「世界をつなぐユニバーサル・ミュージアム:「“触”の大博覧会」開催の意義」**/ Koujirou Hirose, “the Universal Museum Creates a World without Borders: Exploring the New Field of Tactile Sensation” Mathias Blanc（Associate Researcher, Ecole du Louvre）, “Visitors' Interaction in Museum and Augmented Reality : the Ikonikat 3D Experience at the Louvre-Lens Museum” Dirk vom Lehn（Academics. Reader in Organisational Sociology, Kings College London）, “Experiencing Art in Interaction” ==== **総合討論　パンデミック時代のアート・ミュージアム**　20:40～21:30 司会　加藤有希子、陳海茵 指定討論者（問題提起）：柳沢秀行（大原美術館学芸統括）、暮沢剛巳（東京工科大学教授） パネリスト：司会者、登壇者、運営委員 ==== 共催　「観客と共創する芸術―光・音・身体の共振の社会学的・芸術学的・工学的研究」日本学術振興会、課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業、領域開拓プログラム 共催　「パンデミック時代における協働の諸方法研究会」 共催　「多文化社会状況における多人数相互行為の解明に基づく多文化社会対応システムの構築」 科学研究費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)） 共催　「人間とロボットの共生のための社会学的ロボット学」科学研究費基盤研究(B) 共催「高齢者や故郷を離れた人々の日常性と共在性を支援するシステムの社会学的工学的研究」科学研究費基盤研究(A)
お問い合わせ	国際シンポジウム運営事務局 ethnomethodologylab ［at］ gmail.com（[at]をアットマークに変換してください）

名称	パンデミック時代における科学技術と想像力
日時	【第１部、第２部】2021 年 3 月 27 日（土） 9:00～13:30 【第３部、第４部】2021 年 3 月 28 日（日） 9:00～13:30 ※いずれか一方のみの日程での参加も可能です。
会場	Zoom ウェビナー（参加費無料、日英同時通訳付き） 定員：各日 400 名 ※受付は先着順とし、定員になり次第、締め切りとさせて頂きます。
申し込み	申込フォーム[https://forms.gle/5fjRMk8f34oJKNmo9]よりお申し込みください。お申込みいただいた皆様の E-mail アドレスに、Zoom ウェビナーの参加方法を後日お送りいたします。
内容	**【3 月 27 日（土）】** 総合司会・進行　山崎敬一（埼玉大学教授）

開会挨拶　重原孝臣（埼玉大学理事）　9:00～9:20

====

第１部　プレナリーセッション　科学技術と想像力　9:20～11:00

司会　杉浦晋（埼玉大学教授）

登壇　長谷敏司（SF 作家・日本 SF 作家クラブ理事）「基調報告１　巨大リスクと生活の想像力」/ Satoshi Hase "Giant Risks and the Imagination of Life"

司会　久木田水生（名古屋大学准教授）

登壇　一田和樹（作家）「基調報告２　民主主義のゼロデイ脆弱性」/ Kazuki Ichida "The zero-day vulnerability of our democracy"

====

第２部　パンデミック時代における科学技術がもたらす協働と分断化 11:10～13:30

司会　小林亜子（埼玉大学教授）、久木田水生（名古屋大学准教授）

井上智洋（駒澤大学准教授）「人工知能と雇用の未来」/ Tomohiro Inoue, "The Future of Artificial Intelligence and Employment"

金井郁（埼玉大学教授）「コロナによる対面営業の変化とジェンダー：生命保険営業の事例から」/ Kaoru Kanai, "How face-to-face sales will change under Covid-19 Pandemic in Japanese Life-Insurance Companies?"

全体討論（パネリスト：司会者・登壇者・運営委員）

==========

【3 月 28 日（日）】

総合司会・進行　山崎敬一

挨拶　坂井貴文（埼玉大学学長）

第３部　プレナリーセッション　科学技術と想像力　9:20～11:00

司会　野中進（埼玉大学教授・教養学部長）

登壇　沼野充義（名古屋外国語大学副学長・東京大学名誉教授）「基調報告３　空想する文学と世界終末のヴィジョン：ロシア・東欧作家たちは危機とどう向き合ってきたか」/Mitsuyoshi Numano "The Literature of Science Fiction and Visions of the End of the World: How Russian and East European Writers Have Coped with Crises?"

司会　大澤博隆

登壇　立原透耶（作家）「基調講演４　中国 SF と文明、教育」/ Toya Tachihara "Chinese science fiction, civilization and education"

====

第４部　パンデミック後の知能と社会　11:10～13:20

司会　大澤博隆

安西祐一郎（日本学術振興会顧問・元中央教育審議会会長）「共感の認識論」/ Yuichiro Anzai "Epistemology of Empathy"

暦本純一（東京大学教授）「Augmented Society：人間拡張がつくる未来社会」/ Junichi Rekimoto, "Augmented Society: the Future Society created by Human Augmentation"

村上祐子（立教大学教授）「誰も取り残さない社会に備える情報教育」/ Yuko Murakami "Information Education toward the Society with Nobody Left Behind"

	全体討論（パネリスト：長谷敏司、一田和樹、戸田山和久（名古屋大学教授）＋司会者・登壇者・運営委員） ==== 閉会挨拶　川合真紀（埼玉大学副学長）　13:20～13:30 ==== 共催　「パンデミック時代における協働の諸方法研究会」（代表・山崎敬一） 共催　科学研究費挑戦的研究（萌芽）「語り・身体・イメージの連関と変容の学際的研究―エスノメディアロジーの構築」（代表・山崎敬一） 共催（第２部）　基盤研究(A)「ポストトゥルースの時代における新しい情報リテラシーの学際的探求」（代表・久木田水生） 共催（第４部）JST RISTEX HITE 想像力のアップデート：人工知能のデザインフィクション（代表・大澤博隆）
お問い合わせ	国際シンポジウム運営事務局 ethnomethodologylab［at］gmail.com（[at]をアットマークに変換してください）

「パンデミック時代におけるアート・ミュージアム・インタラクション」【登壇者・司会・パネリスト等 略歴（順不同）】

山崎敬一
博士(文学)(早稲田大学)。埼玉大学人文社会科学研究科部教授。専門は社会学、エスノメソドロジー、会話分析、ヒューマンコンピュータインタラクション、ヒューマンロボットインタラクション。主な著書として『モバイルコミュニケーション』(編著、大修館、2006 年)、『美貌の陥穽：セクシュアリティーのエスノメソドロジー（第２版)』(ハーベスト社、2010 年)、『社会理論としてのエスノメソドロジー』(ハーベスト社、2004 年)。

井口壽乃
埼玉大学人文社会科学研究科教授。専門は映像論、メディアアート論、デザイン史。
主著に『ハンガリー・アヴァンギャルド：MA とモホイ＝ナジ』(彩流社、2000 年)、編著に『視覚文化とデザイン』(水声社、2019)、訳書に『ヴィジョン・イン・モーション』(国書刊行会、2019 年）他、多数。

加藤有希子
埼玉大学基盤教育研究センター准教授。専門は近現美代術史、表象文化論。主著に『新印象派のプラグマティズム』(三元社、2012 年)、共著に『ゆらぎ：ブリジット・ライリーの絵画』DIC 川村記念美術館、2018 年）など多数。

児玉幸子
アーティスト、電気通信大学准教授。筑波大学芸術学研究科修了、博士（芸術学)。漆黒の液体（磁性流体）による有機的でダイナミックな動きをテーマにした作品を発表。代表作「呼吸するカオス」、「突き出す、流れる」など。現象のデザイン、芸術創造のための道具を作ることから初めて、変化する形・色彩・空間と視覚・身体の関係性を探求。

ビュールク・トーヴェ

埼玉大学人文社会科学研究科准教授。博士（文学、立教大学）。専門分野は、日本近世文学および芸能史。著書に『二代目市川團十郎の日記にみる享保期江戸歌舞伎』（文学通信）などがある。

小林貴訓
埼玉大学理工学研究科教授。博士(情報理工学、東京大学)。専門分野は、コンピュータビジョン、知能ロボティクス。各種センサによる人物行動の計測とそのインタラクティブシステムへの応用に興味を持つ。

広瀬浩二郎
国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授。13 歳の時に失明。筑波大学附属盲学校から京都大学に進学。2000 年、同大学院にて文学博士号取得。専門は日本宗教史、触文化論。「ユニバーサル・ミュージアム」（誰もが楽しめる博物館）の実践的研究に取り組み、“触”をテーマとする各種イベントを全国で企画・実施している。最新刊の『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける！』（小さ子社、2020 年）など、著書多数。

Dirk vom Lehn（ダーク・フォン・レーン）
Dirk vom Lehn is Professor of Organisation and Practice and member of the Work, Interaction and Technology Research Group at King’s Business School, King’s College London. In his research, Dirk conducts ethnomethodological analyses of interaction in museums and optometric consultations as well as on street-markets and in dance lessons.
キングズ・カレッジ・ロンドン、オーガナイゼイション・アンド・プラクティス教授、およびキングズビジネススクールのワーク・インタラクション・テクノロジー・リサーチグループ所属。専門はミュージアム、検眼検査、場外市場、ダンスレッスンなどにおける相互行為のエスノメソドロジー研究。

Mathias Blanc（マチアス・ブラン）
Mathias Blanc has specialized on reception studies of works of art in museum visit situations. Trained in France and Germany, the teachings of the Bildwissenschaft (the German Visual Studies), enriched by video analysis of social interaction approaches, have led him to conceive digital devices of visual annotation.
As associate research fellow at the Ecole du Louvre in Paris and research fellow at the University of Lille in France, his constant collaboration with the Louvre-Lens museum provides a privileged fieldwork for this research. This innovative scientific perspective benefits from the support of the French National Research Agency, the French National Center for Scientific Research, the University of Lille and the Satt Nord (http://www.visuall-tek.org/).
専門はミュージアムにおける芸術の受容研究。これまでフランスとドイツで研究に従事し、ドイツの視覚研究(Bildwissenschaft)の教育経験、相互行為のビデオ分析などの経験がある．また最近ではこれらの研究・教育の経験を踏まえ，ヴィジュアル・アノテーションが可能なデジタル機器について着想している。現在は、パリのルーヴル美術館大学の研究員およびリール大学研究員であり、ルーヴル美術館ランス別館と協力することで、独自のフィールドワークを行なっている。ブラン博士の革新的な研究視点は、フランス国立研究エージェンシー、フランス科学研究国立センター、リース大学、そして SATT Nord からの研究協力をもたらしている。

柳沢秀行
公益財団法人大原美術館学芸統括。筑波大学芸術専門学群芸術学専攻卒業。岡山県立美術館学芸員を経て、2002 年より大原美術館に学芸員として勤務。共著に『日本美術館』（小学館、1997 年）、『吉備の歴史と文化』

（行人社、2006 年）、『大原美術館で学ぶ美術入門』（JTB キャンブックス、2006 年）など。

暮沢剛巳
東京工科大学デザイン学部教授。専門はデザイン論、デザイン史。著書に『オリンピックと万博』（ちくま新書、2018 年）、『エクソダス―アートとデザインをめぐる批評』（水声社、2016 年）など多数。

浜日出夫
東京通信大学情報マネジメント学部教授。専門は社会学。著書に『実践エスノメソドロジー入門』（共著。有斐閣、2004 年）、『被爆者調査を読む：ヒロシマ・ナガサキの継承』（共編著。慶應義塾大学出版会、2013 年）ほか。

池谷のぞみ
慶應義塾大学文学部教授。専門はエスノメソドロジー、知識社会学、図書館情報学。著書に『Relevance and Irrelevance: Theories, Factors and Challenges』（共著。De Gruyter、2018 年）、『図書館は市民と本・情報をむすぶ』（共編著。勁草書房、2015 年）他。

山崎晶子
東京工科大学メディア学部准教授。専門はヒューマンコミュニケーション、社会学、相互行為分析。共著に『コミュニケーション能力の諸相：変移・共創・身体化』（ひつじ書房、2013 年）など多数。

西澤弘行
常磐大学人間科学部コミュニケーション学科・人間科学研究科教授。専門は EMCA、言語学、コミュニケーション学、認知科学、デザイン科学。共訳書に『意味論的転回：デザインの新しい基礎理論』（エスアイビー・アクセス、2009 年）がある。

陳海茵
東京大学大学院学際情報学府博士課程、埼玉大学大学院人文社会科学研究科研究員。中国現代アート市場を対象とした社会学研究に取り組む。論文に「中国現代アートとアクティビズムにおける政治の多義性：ポスト文革期の前衛芸術グループ星星画会を事例に」『年報カルチュラル・スタディーズ Vol.5』（創文企画、2017 年）などがある。

荒野侑甫
埼玉大学学術研究員（博士・千葉大学）。専門は異文化コミュニケーション、インストラクション、知覚のエスノメソドロジー・会話分析。これまで Journal of Pragmatics, Journal of International and Intercultural Communication, Discourse Studies などに論文を寄稿している。

「パンデミック時代における科学技術と想像力」【登壇者・司会・パネリスト等 略歴（順不同）】

山崎敬一（上掲）

野中進

埼玉大学教養学部長・人文社会科学研究科教授。専門はロシアの文学、思想。著書に『秘められた比喩：アンドレイ・プラトーノフの文体の詩学[ロシア語]』（セルビア：ロゴス社、2019 年）、訳書に『革命記念日に生まれて　子どもの目で見た日本とソ連』（東洋書店新社、2020 年）、共編著に『再考ロシア・フォルマリズム　言語・メディア・知覚』（せりか書房、2012 年）など多数。

小林亜子
埼玉大学人文社会科学研究科教授。専門は近代フランスの社会文化史。著書に『フランス王妃列伝：アンヌ・ド・ブルターニュからマリー=アントワネットまで』（共著、昭和堂、2017 年）、『日本人と日系人の物語：会話分析・ナラティヴ・語られた歴史』（共著、世織書房、2016 年）、『規範としての文化：文化統合の近代史』（共著、ミネルヴァ書房、2003 年）など多数。

大澤博隆
筑波大学システム情報系助教。日本 SF 作家クラブ理事。ヒューマンエージェントインタラクション、人工知能の研究に幅広く従事。2018 年より JST RISTEX HITE プログラム「想像力のアップデート：人工知能のデザインフィクション」リーダー。共著として『人狼知能：だます・見破る・説得する人工知能』（森北出版、2016 年）、『人とロボットの〈間〉をデザインする』（東京電機大学出版局、2007 年）など多数。

久木田水生
名古屋大学情報学研究科准教授。専門は言語哲学、技術哲学、技術倫理、人文情報学。主な著書に『人工知能と人間・社会』（共著、勁草書房、2020 年）、『ロボットからの倫理学入門』（共著、名古屋大学出版会、2017 年）、主な翻訳書にアンディ・クラーク『生まれながらのサイボーグ：心・テクノロジー・知能の未来』（共訳、春秋社、2015 年）などがある。

杉浦晋
埼玉大学人文社会科学研究科教授。専門は日本近代文学。石川淳など、昭和時代の文学者の作家研究、ハンセン病及び「南方」表象の研究、プロレタリア文学に関わる、昭和時代の批評史研究を行っている。

一田和樹
作家。IT 企業経営者を経て、綿密な調査と IT の知識をベースに、現実に起こりうるサイバー空間での情報戦を描く小説やノンフィクションの執筆活動を行う作家に。著書に『フェイクニュース：新しい戦略的戦争兵器』（角川新書、2018 年）など多数。

長谷敏司
SF 作家。日本 SF 作家クラブ理事。2001 年『戦略拠点 32098 楽園』にて第 6 回スニーカー大賞金賞受賞。『あなたのための物語』（早川書房、2011 年）が第 30 回日本 SF 大賞と第 41 回星雲賞日本 長編部門にノミネート。『My Humanity』（ハヤカワ文庫 JA、2014 年）で第 35 回 日本 SF 大賞受賞。2016 年度より日本 SF 大賞選考委員を務める。『BEATLESS』の世界観と設定をオープンリソースにする「アナログハック・オープンリソース」を運営している。

井上智洋
駒澤大学経済学部准教授。慶應義塾大学 SFC 研究所上席研究員。専門はマクロ経済学、貨幣経済理論、成長理論。著書に『人工知能と経済の未来：2030 年雇用大崩壊』（文春新書、2016 年）、『MMT 現代貨幣理論とは何

か』（講談社、2019 年）など多数。AI 社会論研究会共同発起人。

金井郁
埼玉大学人文社会科学研究科教授。専門は労働経済論、ジェンダー論。東京大学社会科学研究所で特任研究員を経て現職。主な論文に「女性活躍推進法における企業行動：生命保険会社９社を事例に」(『日本労働社会学会年報』27 号）など。

立原透耶
1991 年「夢売りのたまご」でコバルト読者大賞受賞。『立原透耶 著作集』(全 5 巻/彩流社)など SF やファンタジー、ホラー小説を執筆。また中華圏 SF の紹介者と して活動中。『時のきざはし 現代中華 SF 傑作選』(編著)、『三体』(監修)のほ か王晋康、韓松、郝景芳などの翻訳を担当。2018 年より中日科幻文化交流大使を 拝命中。「立原透耶氏の中華圏 SF 作品の翻訳・紹介の業績に対して」にて、第 41 回日本 SF 大賞特別賞受賞。

沼野充義
名古屋外国語大学副学長。東京大学名誉教授。東京大学教養学部を卒業、ハーバード大学スラヴ語スラヴ文学科に学ぶ。東京大学教授を経て、2020 年より現職。著書に『チェーホフ　七分の絶望と三分の希望』(講談社)、『徹夜の塊 3 世界文学論』(作品社)、訳書に『ナボコフ全短篇』(作品社、共訳)、スタニスワフ・レム『ソラリス』(国書刊行会）など多数。

安西祐一郎
日本学術振興会顧問・元中央教育審議会会長。著書に、『心と脳：認知科学入門』(岩波書店、2011 年)、『「デジタル脳」が日本を救う：21 世紀の開国論』(講談社、2010 年)、『認識と学習』(岩波講座ソフトウェア科学)（岩波書店、1989 年)、『問題解決の心理学：人間の時代への発想』(中央公論新社、1985 年）ほか多数。

暦本純一
情報科学者。東京大学情報学環教授、ソニーコンピュータサイエンス研究所フェロー・副所長、ソニーCSL 京都ディレクター。世界初のモバイル AR(拡張現実)システム NaviCam を 1990 年代に試作、マルチタッチの基礎研究を世界に先駆けて行うなど常に時代を先導する研究活動を展開している。現在は、Human Augmentaion(人間拡張)をテーマに、人間と AI の能力がネットワークを越えて相互接続・進化していく未来社会ビジョン Internet of Abilities (IoA)の具現化を行っている。

村上祐子
立教大学人工知能科学研究科・文学部教授。専門は情報哲学。エージェント・行為概念の論理的挙動を演繹的に記述するプロジェクトを中心に、演繹的推論と帰納的推論の融合に取り組んでいる。共著に『科学技術をよく考える：クリティカルシンキング練習帳』(名古屋大学出版会、2014 年)、『情報倫理入門』(アイ・ケイコーポレーション、2014 年）など多数。

戸田山和久
名古屋大学情報学研究科教授。専門は哲学（分析哲学・科学哲学)、科学技術社会論、技術者倫理学。著書に『哲学入門』(ちくま新書)、『論理学をつくる』『科学的実在論を擁護する』(以上、名古屋大学出版会)、『知識の哲学』(産業図書)、『科学哲学の冒険』『新版 論文の教室』(以上、NHK ブックス)、『「科学的思考」のレッスン』『恐怖の哲学』(以上、NHK 出版新書）など多数。